

『元朝秘史』におけるベクテル、ベルグテイ、 “ベルグテイの母”の考察 — “ベルグテイの母”の出身仮説をもとに—

藤井 真湖

本論はモンゴルの『古事記』とも言うべき『元朝秘史』（以下、秘史）を“文学作品”として位置付け、その史実性を保留した上で、当該作品のテキスト分析をおこなうものである。対象として取り上げるのは、チンギス・カンの異母兄弟であるベクテルとベルグテイという2人の兄弟、そして彼らの母“ベルグテイの母”の3人である。この3人はチンギス・カンの父イエスゲイ・バートルの「正妻ではない」妻とその2人の息子から構成される「もう一つのチンギスの家族」といえる。イエスゲイがタタル族に殺害された後、イエスゲイの正妻ホエルンとチンギスを始めとする子供たちは、このもう一つの家族と身を寄せ合って暮らしていたことが秘史から読み取れるが、決して多くは語られない。しかし、イエスゲイの正妻ではない妻である“ベルグテイの母”をタタル族の出身者と仮定してこの3人の叙述をそれぞれ考察すると、秘史では明示的には語られなかった一連の非明示的ドラマが立ち現れてくる。本論ではその非明示的ドラマの軌跡をたどる。

1. 本論の目的及び議論の流れ

本論の目的は、モンゴルの古典文学作品『元朝秘史』（以下、秘史と略す）におけるチンギス・カン（幼名テムジン）の異母兄弟であるベクテル、ベルグテイ、及び彼らの母というチンギスの「もう一つの家族」ともいうべき3人の人物に言及されるすべての箇所を検討することによって、彼ら3人についての明示的に読み取れる物語とは全く異なる非明示的物語が存在することを提示することである。ただし、本論の考察は、チンギスの父イエスゲイ・バートルの妻ホエルンとは別のもう一人の妻“ベルグテイの母”がタタル部族出身であるという前提でおこなうものとする。イエスゲイ・バートルのもう一人の妻は、秘史において常に“ベルグテイの母”と表現されており、実名は記されていないので、本論でも“ベルグテイの母”と記述することにする。筆者はこれまでチンギスの父イエスゲイ・バートルの第二夫人を、秘史には直接記述はないものの、タタル出身者ではないかという一連の論を展開してきた¹⁾。本論はこの仮説すなわち“ベルグテイの母”＝タタル部族出身者を前提として展開するものである。

以下の議論では、当該人物に言及される叙述が早く終わる順に、ベクテル、“ベルグテイの母”、ベルグテイの順に焦点を当てて論じることにする。ただし、“ベルグテイの母”の考察の前段として“母なる夫人”という表現についても検討することにした。考察では秘史でそれぞれの人物に言及される箇所を漏れなく検討に付すことにするが、この場合、それぞれの人物に言及される回数及び転写方法は、四部叢刊本『元朝秘史』を対象に編まれた栗林均・确精扎布編『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』をもとにしている（以下、『索引』²⁾）。この

文献における表示法は四部叢刊本の「巻：丁：行」で示されているが、巻及び慣習的に用いられている § (節番号) と一緒にこれを提示しておく。なお、本論で提示される秘史の日本語訳は、小沢重男の一連の著作における訳を再構成したものである³⁾。ただし、本論では当該箇所秘史の叙述を直接に引用する場合、チンギスを幼名「テムジン」と記述している場合があるが、その他の論述箇所では「チンギス」と統一して記述したことを断っておく。

2. ベクテル—ベクテル殺人事件の謎—

ベクテルに言及されるのは、『索引』によると、巻 2 § 76 の 02:07:07, 02:07:09, 02:08:01, 同巻 § 77 の 02:09:06, 02:09:08 の計 5 箇所である。このようにベクテルに言及される箇所は § 76 と § 77 に限定されていることがわかる。内容としては、前節でイエスゲイの 2 人の夫人の子供たちの間に食糧分配をめぐる不和が生じたことが語られ、後節ではその不和の帰結としてベクテルがチンギスとカサルに殺害されるという事件が語られる。§ 76 の内容は次のように要約できる。

ある日、チンギス、カサル、ベクテル、ベルグテイの 4 人が一緒に釣りをしていたときに、ソゴスン soyusun という名の川魚がかかる。その魚を、チンギス、カサルの 2 人からベクテル、ベルグテイの 2 人が奪う。チンギスとカサルはこの顛末を“母なる夫人”に言うと、“母なる夫人”は、「影以外に友もなく、尾以外に脂ないときに、タイチウド兄弟の与えた苦しみをどのようににはらすべきかと言っているときに、なぜかつてのアラン母の五人の子供たちのように仲良くできないのか」と取り合わない。

この § 76 の内容を受けて § 77 では、チンギスとカサルは“母なる夫人”の言葉を面白く思わずに、チンギスはカサルに次のように言ったと書かれている (02:09:03-02:09:05)。

öçigen nikente bilji'ür qodolid=u=qsan-i teyin gü buli=ju ab=u=la'a. edö'e basa teyin gü buli=ba. qamtu ker aldu=qun bida.

以前、一度、ひばりをゴドリで射ったのをこのように奪い取った。今もまたこのように奪った。我々は一緒にどうして暮せようか。

チンギスのこの発言にもとづけば、ベクテル兄弟は以前にもひばりを同様に奪ったことになるが、これは、あくまでもチンギスの言葉によるものであって、秘史において実際に起こった出来事としては叙述されていない。つまり、ベクテル殺害に至るチンギス兄弟の動機としては、§ 76 のベクテル兄弟による川魚の取奪以外に見当たらないのであるが、「一度ならず」こうしたベクテル兄弟による不正があったかのような錯覚を起こさせるような叙述がなされている。それゆえ、もしこのチンギスの言葉を不注意に読めば、ベクテル兄弟は、一度ならず不正を犯す、始末しないとイケないような兄弟として印象付けられることになる。チンギス、カサルというホエルンの 2 人の息子と、ベクテルとベルグテイという“ベルグテイの母”の 2 人の息子の 4 人の子供たちのあいだで起こった巻 2 § 76 における食料の奪い合いというこの不和は、ベクテル殺害へとチンギスとカサルを駆り立てた唯一の事件だということを強調しておく必要がある。

それゆえここで新たに浮上する問題は、ベクテルは食糧分配の不正によってチンギスとカサルによって殺害されたかのように見えるが、それだけではない理由があったらしいことである。このベクテル殺害の非明示的意味については、“ベルグテイの母”と関連付けて論じなければならないと考えるが、ベクテルに言及されるベクテルの次のような最後の言葉をその導入として挙げておきたい (§ 77 の 02:10:02-02:10:04)。

《...se'üder-eče busu nökör ügei se'ül-eče busu čiču'a ügei-tür yeki=n teyin setki=be ta.qolumta min-u bü bürelge=tkün.Belgütey-yi bü tebči=tkün.》 ke'e=et jabila=n sa'u=ju güliche=be.

「(略) …影より他の友なく、尾よりも他の脂ないときに、なぜお前たちはこのように思えるのか。わが炉を壊すな。ベルグテイを殺すな。」と言って、胡坐をかいて殺されるのを待った。

「炉 qolumta」は家の象徴である。それゆえ、「炉を壊す」とは「炉の火を絶やす」ということで、「子孫を絶やす」ことを意味する⁴⁾。ベクテルの言葉をみると、ベクテルとベルグテイの炉はイエスゲイとは別にあることを示しており、それゆえ、この炉は“ベルグテイの母”の炉であることになる。父系出自をとるモンゴル社会において、父が同じである場合、母が異なった場合においても、その子どもたちは父の出自に入るものと考えられている。この考えに基づけば、チンギスとベルグテイはどちらもイエスゲイを父としているため、出自的な差異はないように思われる。しかし、実際には根本的な差異があったことがチンギスとカサルに殺される今際に発したベクテルのこの発言に示されている。

ここで本論の前提としている仮説では、“ベルグテイの母”の出身はタタル部族と考えられるため、ベクテルの言うところの炉とはタタルの炉のことを示すことになる。それゆえ、夫イエスゲイ亡き後において、ホエルンと“ベルグテイの母”というイエスゲイの2人の夫人たちの力関係は、モンゴル対タタルの関係を示していることになる。ベクテルの最後の発言は、イエスゲイの死後当初、両者の力関係が均衡していたことをうかがわせ、ベクテルの死によってその均衡が崩れることを示唆しているのではないかと思われる。

これに関連して指摘しておくべきことと思われるのは、チンギス一家がタイチウド族に捨てられた後、ホエルンの出身であるオルクヌウト（ホンギラトの分枝）とタタルとの関係におけるオルクヌウトの優位性が揺らいだ可能性である。なぜなら、秘史の叙述を見る限り、ホエルンが実家から援助を受けたというような叙述は全くなく、イエスゲイの死後、ホエルンは孤立無援で奮闘したさまが描かれているからである。ホエルンの立場は実家からの支援についての言及がこれまた皆無の“ベルグテイの母”と異なる点はない。

以上から、なぜベクテルがチンギス兄弟に殺されなければならなかったかという理由は、ベクテルの母＝“ベルグテイの母”に関係しているのではないかという推測が生まれてくる。

3. “母なる夫人 üjin eke” が指示する夫人— “母なる夫人 üjin eke” 解釈の再考—

2. で述べたように、ベクテルの死の謎に迫るには“ベルグテイの母”の検討が欠かせない。そこで、この人物に直接言及される箇所より前の箇所で言及される、“ベルグテイの母”と明

示されていないものの、実はこの人物を指していた可能性のある“母なる夫人 üjin eke”という表現を考察してみたい。なぜなら、ひとつには、“ベルグテイの母”は実の息子であるベクテルがホエルンの息子チンギス兄弟に殺されたときにチンギス一家にいたと考えられるにも関わらず、秘史には“ベルグテイの母”がこの事件にどのような反応を示したのかが全く記されていないからである。もう一つには、“ベルグテイの母”の反応が記されていないにも関わらず、この殺害事件の前後で“母なる夫人”という曖昧な表現が3度現れているからである（巻2 §76 の02:07:10, 02:08:03 及び同巻 §78 の02:11:02）。このような事実から、“母なる夫人 üjin eke”を考察することによって、ベクテルの死の謎に迫ることができるのではないかと思われるのである。むろん、ベクテルが殺害された際の“ベルグテイの母”についての叙述が欠落している背景には、秘史の「作者」によるチンギスに対する配慮があるものと推測されるが、これについて考察することは必須のように思われる。重要なのもう一度 §76 を繰り返すと、考察の対象となるのは次の場面である。

ある日、チンギス、カサル、ベクテル、ベルグテイの四人が一緒に釣りをしていたときに、ソゴスンという名の川魚がかかる。その魚を、チンギス、カサルの2人からベクテル、ベルグテイの2人が奪う。この顛末を、チンギスとカサルが“母なる夫人”に言うと、“母なる夫人”は、「影よりもほかに友もなく、尾よりも他の脂ないときに、タイチウド兄弟の与えた苦しみをどのようにはらすべきかと言っているときに、なぜかつてのアラン母の五人の子供たちのように仲良くできないのか」と言う。

この叙述で“母なる夫人”と訳出されてきた üjin eke という人物は、これまでチンギスとカサルの母「ホエルン」と考えられてきたのであるが、実は“ベルグテイの母”のことではないかと考えることができるのではないかということをごここで提起してみたい。実際、“ベルグテイの母”の息子たちが「不正」をしたという理由で、チンギスとカサルが“ベルグテイの母”に不満を表明したことは十分にありうることに思われる。もし“母なる夫人”が“ベルグテイの母”であるなら、“ベルグテイの母”はチンギスやカサルの言い分に全く耳を傾けておらず、逆に叱責していることになる。すると、これと連動して §77 の、“母なる夫人”に対して「テムジンとカサルは気に入らず Temjin Qasar qoyar ülü ta’ala=n (02:09:02)」とあるのは、ホエルンに対する不満ではなく、“ベルグテイの母”に対するものであったことになる。そして、チンギスやカサルのこうした不満の後、チンギスとカサルによるベクテル殺害事件が起こるのである。

一方、殺害事件の後に、チンギスやカサルを叱責する §78 の“母なる夫人”は、同一表現であるものの、“ベルグテイの母”ではなくホエルンである。なぜならば、その“母なる夫人”が開口一番に次のように言っているからである (02:11:03-02:11:05)。

qala’un-aça min-u qalat qar=u=run qar-dur-iyān qara nōdün hatqu=n töre=ligi ene
お前は私の熱いところから勢いよく生れるときに、黒い血の固まりを手を持って生れた。

ここで「熱いところ qala’un」というのは、子宮や女陰の意と読めるので、ここで指示している子供は明らかにチンギスである。それゆえ、これまでの解釈では、3番目に出現する“母

なる夫人”がホエルンであることは誤読しようがないので、その手前に出現する2つの“母なる夫人”もホエルンであると解釈されてきたのであろう。

しかし、もう一步深く踏み込めば、逆に、§78の場面において敢えてチンギスやカサルを「私が産んだ」という意味を明示するような言葉が用いられている点に注意を払う必要があるように思われる。すなわち、このことがむしろ、前述の、すなわちチンギスやカサルが揉め事を告げ口に言った“母なる夫人”が、彼ら自身の実母ホエルンではない可能性を逆に暗示しているといえるのではなからうか。つまり、逆説であるが、場面ごとに異なる“母なる夫人”解釈に対する最も否定的な証拠が最も肯定的な証拠となりうるのである。

むろん、これが妥当であるならば、“母なる夫人”というような複雑な表現をしていることからみると、秘史は、明示的には、“母なる夫人”を終始「ホエルン」と読ませたかったのだと考えられる。その背景には、ホエルンが、事実上、チンギスとカサルのベクテル殺しによって、“ベルグテイの母”よりも優位に立つ地歩を確立したということを伏せておきたかったという事実があるのだと考えられる。秘史では、イエスゲイの略奪によって連れてこられたホエルンからチンギスが生まれていることが明示的に叙述されていること、もう一つは“ベルグテイの母”の婚姻に関する叙述がないことの2つの理由で、ホエルンを「正妻」と扱う慣習がある(むろん、ここでは歴史叙述がチンギス・カンを起点に構成されてきたことも関係している)。それゆえ、“ベルグテイの母”をア・プリオリに「第二夫人」として扱ってきたということがあるため、チンギスの母とベルグテイの母との勢力における優劣関係という問題を可視化させてはならなかったという事情が推測される。

だが、筆者の一連の研究から、ホエルンはイエスゲイの第一夫人とはいっても、もともとは第二夫人であった可能性が高いので⁵⁾、イエスゲイ亡き後においては、事実上、ホエルンが第一夫人という地位をそのまま享受できたとは考えにくい。両夫人はそれぞれ自分の子供たちをかかえながら、相互に微妙な関係のうちに過していたのであろうと想像される。そんな中で起きたチンギスとカサルによるベクテル殺しは、ホエルンと“ベルグテイの母”との均衡を打ち破る決定打となったと考えることができる。この事件によって、2人のうち一人の息子を失ったことで、“ベルグテイの母”の地位は一挙に下がり、逆にホエルンの地位の上昇につながったのではなからうか。換言すれば、ベクテル殺しの非明示的な意味は、イエスゲイ亡き後の2人の未亡人の権力争いにおけるホエルンの勝利を物語っているものとなるのである。

実際には位置関係が動いたのはホエルンと“ベルグテイの母”のあいだだけではない。このベクテル殺害を機にホエルンとチンギスの位置関係も動いたことにも言及する必要がある。チンギスは、このベクテル殺害により、ホエルンよりも優位に立ち、一家の当主としての地位を確立することになる。ホエルン、“ベルグテイの母”、チンギスの関係は、§99でメルキト族がチンギスたちを襲撃してきたときに、逃走用の馬にどのように乗ったかについての描写で確認できる。秘史による限り9頭しか馬のいないチンギス一家に、ホエルンはチンギスが乗った後、次の2頭目に乗りに乗っているところから見ると、逃げるための馬が与えられなかった“ベルグテイの母”よりもホエルンは比較にならないほど地位が高いことがうかがわれると同時に、チンギスがホエルンよりも地位が高いことが明瞭に見てとれるのである。

補足として述べるなら、一家の当主としてのチンギスの台頭は、ベクテル事件にすぐ後続す

る § 79 のタイチウド族のチンギス一家への「襲撃」に関わっていることになる。これまで女世帯でしかなかったホエルン一家がチンギスを当主とする一家に変貌を遂げたことは、タイチウド族にとって放置しておけない事態であったものと推測される⁹⁾。

以上のように、4人の子供たちの間に揉め事が起こったときに、諫めたのが、ホエルンではなく“ベルグテイの母”であったと考えるならば、ベクテルが殺されたときに、その場にいたはずにも関わらず、“ベルグテイの母”に何ら言及されていないことを次のように考えることができる。“ベルグテイの母”は、単純に「息子を殺害された母」という被害者というわけにはいかない事情があったと考えるのである。その事情とは、ベクテル殺しの動機となった揉め事の調停を彼女が不適切に処理していたということである。つまり、魚を強奪し分配を拒否するという「不正」を働いたのが自分の息子たちであるベクテルとベルグテイであったにも関わらず、“ベルグテイの母”は自分の子供たちを罰しなかった。それどころか、彼女はチンギスやカサルを逆に叱責していたのである。

一方、ホエルンに目を向けると、自分の息子チンギスがハサルと共謀してベクテルを殺害したことの負い目があったことは、巻4 § 135 でモンゴル族がタタル族を殲滅する際に、チンギスはタタル族の領地から拾った子供をホエルンに“贈呈し”、ホエルンがこの子供を養子にしていることに表われているといえる。このタタルの子供は“シギ・ホトク”という名前である。ホエルンにはシギ・ホトクを含め、養子がメルキト族の居住地から得られたクチュ、タイチウド族のなかのベスト族の居住地から得られたココチュ、ジュルキン族の居住地から得られたボロクル（四駿の一人）、と合計4人いるが⁷⁾、このタタル陣営から拾ったシギ・ホトクだけが特別に“チンギスの第六番目の弟”におさまるのである。拾い子のなかでもタタルの子供が特別待遇されているのである。シギ・ホトクを発見したときの様子を秘史は巻4 § 135 で次のように語っている（04:17:02-04:17:09）。

altan e'emek dōrebčitü dasi torqan buluqa-ar dotorla=qsan helige[b]čitü üčü'ügen kö'üken-i a[b]čira=ju Činggis_qahan Hö'elün_eke-de sauqa ke'e=n ök=bei Hö'elün_eke ügüle=rün 《sayin gü'ün-ü kö'ün a=ju'u je. huja'ur sayitu gü'ün-ü uruq büy=yü je.》tabun kö'üd-iyen de'ü jirqodu'ar kö'ün bolqa=n Šikiken_Quduqu ke'e=n nereyit=čü eke asara=ba.

黄金の耳環、鼻輪をつけ、金襴緞子の、貂の皮で裏打ちした胴当てを着た幼子を連れてきて、チンギス・カハンはホエルン母に「贈物なり」と言って与えた。ホエルン母の言うのに、「よき人の子なるぞ。出自よき人の一族なるぞ。」と言って、己が五人の子らの弟、第六子としてシギケン・ホトクと名付けてホエルン母が養育した。

上記の秘史の叙述をみると、シギケン・ホトクすなわちシギ・ホトクは発見されたときに身なりがよかった。すなわち、かなり高貴な生れであることが想像されたがゆえにチンギスの六番目の弟にしたかのように読める。しかし、これまでの議論を敷衍するならば、タタル出身のシギ・ホトクを「第六の弟」とするのは、ホエルンやチンギスにとって、ベクテルを殺したことの贖罪であった可能性がある。とくに、シギ・ホトクをチンギスの「第六の弟」という意思表示をするのはホエルンであるところを見ると、ホエルンはチンギス以上に贖罪の意識を持つ

ていたのではないかと想像される。

いずれにせよ、秘史の明示的に記された叙述を見る限りにおいては、ベクテル殺害はその後にどのような影響を及ぼしたのかが不明なのであるが、その心理的な後遺症は、シギ・ホトクをチンギスの「第六の弟」として迎え入れるまで実は通低音として響いていたことがうかがわれるのである。

4. “ベルグテイの母” —偶然ではなかったメルキト族の“ベルグテイの母”収奪の可能性—

“ベルグテイの母” 或いはこれ以外にも確実に“ベルグテイの母”を指すものと考えられる表現に言及される箇所は、『索引』から直接知ることはできないが、ベルグテイの名前に言及される表現をもとに探すと、明示的には巻 2 § 101 の 02:46:06, 巻 3 § 112 の 03:20:04 - 03:20:05, 03:20:06, 03:20:07, 03:21:04 の計 5 箇所となる。これら“ベルグテイの母”への言及はすべて、ベクテルという息子がチンギスとカサルに殺害された以降となる。ベクテルが殺害された後、“ベルグテイの母”が登場するのは巻 2 § 101 においてである。ここにおいて、“ベルグテイの母”はメルキト族がモンゴル族に襲撃をかけたさいに掠奪されている。チンギスは、実は、妻ボルテだけでなく“ベルグテイの母”を収奪されていたのである。ここで考察の焦点を当てたいのは、メルキト族に“ベルグテイの母”が奪われた出来事をメルキト族にボルテを略奪された“ついで”におこなわれたものなのかどうかという点である。

ボルテが奪われた背景には、ひとつには、チンギス側が、敵のメルキト族をタイチウド族と誤認したからであると秘史に叙述されている。たしかに、秘史でチンギス一家を襲う敵として最初に登場するのがタイチウド族であり、このタイチウド族の目的はチンギス捕獲にあった。それゆえ、その次に現れた敵をタイチウド族だと思い込んだチンギス一家は、女性のことには注意が向かなかつたらしい。そのために、チンギスは女子供を放置するという「失態」を犯してしまったというのが秘史の書きぶりである。

ボルテを掠奪されたもうひとつの理由には、チンギスの正妻ボルテに逃走用の馬が与えられなかったことがある(巻 2 § 99)⁹⁾。ここで、ボルテに逃走用の馬があてがわれなかったことと、敵が誰かという事実誤認とがどの程度関わりがあるのかは判断できない。なぜなら、9頭の馬しかなかったにもかかわらず、2頭目にはチンギスの母ホエルンが乗っているからであり、馬に乗ったホエルンは掠奪から逃れているからである。いずれにせよ、ボルテに馬が与えられなかったことは、ボルテがメルキト族に掠奪された大きな理由なのである。少なくとも言えることは、この時点においてはチンギスの母ホエルンの地位はボルテよりも高く、だからこそホエルンには馬があったということである。

ところで、従来、このメルキト族の襲撃事件はチンギスの正妻ボルテの掠奪に焦点を当てて論じられてきたといえる。しかし、巻 2 § 101 に初出する“ベルグテイの母”(02:46:06)の前後の内容をみると、この時に、ボルテよりも先に“ベルグテイの母”が捕らわれていることがわかる。同節は、メルキトによるボルテ収奪のさいに、ボルテの世話係をしていたコアクチン老婆という人物がボルテを庇おうとするもののメルキトの兵士たちに見破られて失敗する場面であるが、この事実はこの場面に次のようにさりげなく挿入されている(02:46:02-02:47:03)。

Qo'aqcin_emegen bö'ere alaq hūker-iyen deled=ü=et öterle=n ne'ü=gü bol=u=n tergen=ü tenggeli ququs ot=ba. tenggeli-ben ququra[q]da=ju yabuqad-iyar hoi=tur güyyi=jü oro=ya ke'eldü=n bü=küi-tür daruča müt čeri'üt Belgütey=yin eke=yi sundula'uldu=ju qoyar köl in=u čerbegelje'ül=jü qadara=ju gür=čü ire=e[t] «ene tergen ditora ya'un te'e=jü a=mu.» ke'ebe. Qo'aqcin_emegen ügüle=rün «ungqasun te'e=jü a=mu.» ke'e=bi. tede čeri'üd-ün aqa+nar in=u ügüle=rün de'ü+ner kö'üd-iyen «bawu=ju üje=tkün.»ke'e=be. de'ü+ner kö'üt in=u bawu=ju qa'atai tergen=ü qa'alqa ab=ķui-lu'a ditora qatuqje[!] gü'ün sa'u=ju ima-yi

コアクチン老婆は腰部がまだらな牛に鞭打って、急ぎ移ろうとすると、車の車軸がポキッと折れた。自分の車軸を折られて「徒歩にて森に入ろう」と言い合っているとき、また、さきの兵士たちがベルグテイの母を後部に乗せ彼女の 2 本の足をブラブラたらせて走ってきて、「この車の中には何を積んでいるのか。」と言った。コアクチン老婆は「羊毛が積んである。」といった。彼ら兵士たちの年長者たちが言う。「弟たち、子たちよ、馬から降りて調べろ。」と言った。その弟たち、子たちは、降りて、閉じられている車戸を取り去ると、中に、まさに貴婦人然としている人が座っている（下線筆者）。

上記のように、挿入的にはあるが、ベルグテイの母はボルテよりも先にメルキト部族に収奪されているのである。秘史の巻 2 § 102 に拠れば、メルキト族は自らの行為の理由を次のように語っている (02:48:08-02:49:01)。

erten-ü Hö'elün_eke-yi Čiledü-dača buli=ju abta=la'ai ke'e=n edö'e tere ösö[!]ösö=n ire=[k]se[t] a=ju'u. tede Merkit ügüle[l]dū=rün «Hö'elün-nü hači abura=n edö'e emes-i anu-u ab=u=ba. hači-yan abura=ba bida. »

さきに、母ホエルンをチレドより奪いとられたりと云って、今その仇をとりに来たのだった。彼等メルキト族が言い合うのに「ホエルンのうらみを報じて、今、彼等の女どもをとれり。己がうらみを報ぜり。」(強調点筆者)

メルキト族の「ホエルンがチレドより奪い取られたり」という上記の理由に拠るのであれば、彼らの目的はホエルンであるはずである。しかし、なぜそれなのに、ここでは「彼等の女ども」という表現で曖昧にされているのかという問題がある。「彼等の女ども」を取ったということでホエルンの問題は棚上げにされている。むろん、この時点でイエスゲイはすでに死去しており、時代は次世代のチンギスの時代となっているので、チンギスの母ホエルンよりチンギスの正妻ボルテのほうが重要視されたとみなすことができよう。この視点からみれば、“ベルグテイの母”の掠奪は“ついで”であったということになる。ここで、彼女がイエスゲイの妻であったので、とりあえずホエルンの代わりに掠奪されたと理解してよいかどうかの問題が立ち上がるが、イエスゲイの婚姻の仮説にいまいちど立ち戻って考えてみると、決して“ついで”などではなかったのではないかと思われる事情がみえてくる。

ここで注意を促したいのが、イエスゲイの第一夫人は“ベルグテイの母”であり、イエスゲイのメルキト族のチレドからのホエルン掠奪は、この第一夫人を第二夫人にすり替えるため

あったのではないかという筆者の以前提起した仮説である⁹⁾。その仮説を重要なので繰り返すと、次のようになる。アンバガイ・ハーンはタタル族の裏切りにより金国で殺害されたため¹⁰⁾、イエスゲイはタタル出身の妻が政治的に不利となった。それゆえ第一夫人をタタル族以外にすげ替えることにした。すでに正式な手続きでイエスゲイはタタル族から“ベルグテイの母”（このときはまだベルグテイが生れていないことは確かであるが）を娶っていたために、本来娶るべき女性は横取りされていたので“掠奪”という方法で取り戻す必要があった。

こうした仮説を踏まえると、メルキト族にとって、そのようなイエスゲイの論理は許容しかねるものであったことは明らかであろう。メルキト族にすれば、イエスゲイの正妻はあくまでもタタル出身の“ベルグテイの母”でなければならない。それゆえ、彼らにとっては、ホエルンではなく、“ベルグテイの母”を奪うことが真の報復たりえるのである。それゆえ、ボルテよりも前に“ベルグテイの母”が捕えられているのは、ボルテを奪う“ついで”のことではなく、まさに、彼等メルキト族の目当てであったということになる。彼らは“ベルグテイの母”を奪うことによって、復讐を成し遂げ、さらに次世代のボルテをも掠奪することで、モンゴル族に打撃を与えたということである。

“ベルグテイの母”に言及される次の箇所は巻3 § 112 の 03:20:04 - 03:20:05, 03:20:06, 03:20:07, 03:21:04 の4箇所であるが、“ベルグテイの母”という表現で出現するのは、最初の3:20:04 - 03:20:05 だけで、それ以外は“母”という単語のみ用いられている。いずれの表現にせよ、“ベルグテイの母”に言及されるのはこの節が最後である。ここでは、メルキト族に奪われた“ベルグテイの母”の顛末が述べられている。なお、“ベルグテイの母”は卑しき身分の人間に配されたらしいのに対し、ボルテはメルキト族に掠奪された後、ホエルンの嫁すべき相手だったチレドの弟にあてがわれたことが秘史に記されており、メルキト族における待遇はボルテの方がよかったことがうかがわれる。実際、“ベルグテイの母”は巻3 § 112 で次のように語っている (03:20:09-03:21:02)。

«kö'üt min-u qat bol=ju'u ke'ekde=müi. bi ende mawui gü'ün-tür tube=jü edö'e kö'üd-iyen ni'ur ker üje=küi bi. »ke'et güyyi=jü sişui hoi-tür sirku=ju'u.

「わが子達は王子達になれるという。我はここにて卑しき人に配され、今、己が子達の顔をいかに見るべきか、我は。」と云って走り密林にもぐりこんだ。

上記のような低い身分の人にあてがわれたという“ベルグテイの母”の言葉に基づく限り、メルキト族は“ベルグテイの母”ではなく、ボルテに関心があったようにみえる。この背景には、すでに当時イエスゲイは死去しており、時代が次のチンギスの時代に入っていたことがあると考えられるが、メルキト族が“ベルグテイの母”を身分の低い人に配した真の理由は別にあるのかもしれない。現時点では、“ベルグテイの母”は形式的には過去の因縁の決着として掠奪されなければならないが、最も打撃を与えたいのは現在のチンギスだったから、チンギスの妻であるボルテが重要になったのであろうと理解しておくことにしたい。

秘史においてはこの2人の女性の掠奪事件は“ボルテの掠奪と奪回”というテーマで進行するのであり、チンギスは同盟関係を組んだケレイト族のトオリル・カンに支援を求めると同時に、

“ベルグテイの母”については一切言及していない。とはいえ、秘史はメルキト族に奪われた“ベルグテイの母”の顛末を書き忘れていない事実は注目に値するように思われる。つまり、“ベルグテイの母”は明示的には極力目立たないように叙述されているのであるが、この人物が最終的にどのようなようになったかについては明示的に記されているのである。イエスゲイの婚姻から始まる非明示的物語におけるこの女性の重要性からみれば、これは当然のことと思われる。

“ベルグテイの母”もまたボルテと同様にモンゴル陣営に救出されるはずであった。しかも、実の息子であるベルグテイは彼女の家までやって来ていたのである（巻3§112）。にもかかわらず“ベルグテイの母”は実の息子ベルグテイが迎えにきているときに、上記のように自ら姿を隠すのである。秘史に記された彼女の“言い訳”は、卑しき人に配されたからであるというものである。しかし、彼女がタタル出身者であることからすれば、ベルグテイの将来を思うと、ベルグテイのタタル性は彼女が存在するかぎり消えないことを彼女は認識していたに違いない。ベクテルが殺害されることでタタルはイエスゲイ亡きあとに再び不利になっただけではなく、チンギスがホンギラト族からボルテを娶った段階で、このことは決定的なものとなった。“ベルグテイの母”は息子ベルグテイのために身を引いたと考えていいのではなかろうか。ベルグテイがタタル出身者であるというタタル性を消すには、この“ベルグテイの母”がいなくなるのが最も迅速かつ確実な方法であっただろうからである。

実際の状況としても、時代はタタル族からホンギラト族が優位に立つ時代へと完全に移行しつつあり、彼女がチンギス一家に戻る基盤はすでになかったとみるべきであろう。ただ、“ベルグテイの母”は息子ベルグテイのために身を引くという決断をするさいに、彼女にはメルキトに残ることで矜持を保つことができた理由が存在したことにも注意を向けてみたい。彼女は次のように考えることができたと考える。それは、彼女がメルキト族に掠奪されたのは「イエスゲイの正妻が自分であったからなのだ」という思いである。むろん、これは理論上のことだけであり、すでにイエスゲイは存命しておらず、前述のように、時代はタタル族からホンギラト族が姻族として優位に立つ時代へ移行しつつあった。チンギス一家に戻っても彼女には居場所が残されてはいなかったと見るべきであろう。

このようにして、ベルグテイは自分の母をメルキト領内で探し回るが、ついに母を見つけ出すことはできずに終わる。巻3§112において、メルキト族の領内で母を捜すベルグテイを秘史は次のように綴っている（03:21:03-03:21:04）。

Belgütei_noyan Merkidei ele yasutu gü'ün-ni «eke-yi min-u abčira= »ke'e=jü qodolit=qu bü=le'e.

ベルグテイ長官は、メルキトの骨をもつ人を「我が母を連れて来たれ」と云って鏑矢で射るのだった。（強調点筆者）

こうして、ベルグテイは幼少期に兄を失い、ここでまた母を失う。注意したいのは、この場面でベルグテイの名前に“長官（ノヤン）”という称号がついていることである。この称号は、ベルグテイが母を失う場面で初めて現れている。つまるところ、ベルグテイの出世は、兄を失い、母を失うことで達成される類のものであることがこの称号に暗示されているといえる。ベ

ルグテイにとってタタル出身者という自らの出自を消し去ること、これがチンギスの配下として出世街道を突き進んでいくための必須要件なのである。

このように考えてみると、イエスゲイが、ホエルンから生れた長男に“テムジン”という名前を付けたのも、秘史で明示的に叙述されている理由よりも、もっと深いものがあったのではないかと思われてくる。秘史の巻1 § 59 では、イエスゲイがタタル族からテムジン・ウグという捕虜を連れてくるときに長子が生れたということで“テムジン”という名前をつけたとある。しかしこれは、本当は第一夫人が“ベルグテイの母”であるという本論の仮説からみると興味深い。

名前は存在を表すという考え方がモンゴルにはあるが、これを踏まえると、チンギスには実際にはタタル性がつきまどっているのである。これはタタルからの復讐を受けないようにするための呪術的処置というばかりでなく、第一夫人から第二夫人に身分を降格されたタタル出身の“ベルグテイの母”へのイエスゲイの“配慮”であった可能性も否定できないのである。むしろ、その“配慮”とは、タタル出身の妻を斥けたかわりに、タタル以外の妻から生れた嫡男にタタル出身者の名前をつけるという世にも奇妙なものであった。

5. ベルクテイ—“勇者”としての花道を退場するベルグテイ—

5. 1. ベルクテイのチンギスへの服属のプロセス

次に、ベルクテイに着目して考察するが、ここではすでに論じたベクテル殺害事件や母親をメルキト族に奪われた事件のさいに言及される箇所以外を対象に考察を進めることにしたい。ベクテル殺害事件以降はじめて現れるベルグテイの名前は、巻2 § 79 の次のような箇所である(02:13:08)。ベクテルがベルグテイを殺さないでほしいとチンギスとカサルに懇願して殺されるのが同巻 § 77 であり、そのベクテル殺人を前述のように“母なる夫人”=ホエルン夫人が叱責するのが同巻 § 78 であるから、次の箇所はベクテル事件の余韻が冷めやらない時期のことであることに注意する必要がある(02:13:05-02:13:10)。

tedüi a=tala Tayyici'ud-un Tarqutai_Kiriltuq turqa'ud-iyān udurit=ču «qoluqat qo'oji=ju'u. silüget šiberi=jü'ü.» ke'e=n ire=jü'üi. ayu=ju ekes kö'üt aqa+nar de'ü+ner šikui hoi-tur qorqola=ju Belgütei mudut ququru tatala=ju šibe'e bari=ju Qasar qarbulalda=ju Qaçi'un Temüge Temülün qurban-i jaba ja'ura dürü=jü bulqaldu=n bü=küi-tür

かくするほどに、タイチウド族のタルクタイ・キリルトゥグが、己が配下の者どもをひきつれて、「仔羊どもが脱毛した。誕たらした者どもの涎が止まった。」と言ってやってきた。それを恐れて、母子たち、兄弟たちは密林に砦を築き、ベルグテイは木々をへし折って防御用の柵をつくり、カサルは弓をうち合って、カチウン、テムゲ、テムルンの三人を谷あいに入れて戦い合っている時…(下線筆者)

ここでベルグテイはチンギスが襲撃される際に防御用の柵をつくっているのだから、ベルグテイはチンギスに協力的にふるまっていることがわかる。しかし、ベクテルが殺害されてまもなくのことと考えられるため、このふるまいが真意によるものかどうかは怪しい。いずれにしても、

前節でも述べたように、ベクトル事件によって2人の母親の勢力争いに決着が付き、ホエルンがイエスゲイの「第一夫人」の位置を名実ともに確立し、またそれによって、チンギスの当主としての位置も確立した。

こうした経緯からみると、ベルグテイはチンギスに屈したことになるのだが、ベルグテイが屈したのは表面的にだけであったとみるべきであろう。実際、ベルグテイはチンギスに対してライバル心を燃やしていたことは、巻2 § 90 でチンギス一家の8頭の馬が盗まれる事件において、ベルグテイが盗賊たちを追跡しようと主張しているところに表われている(02:27:10, 02:28:02, 02:28:05)。この時、ベルグテイの主張に対してカサルがその役割を買って出ているが、すかさずチンギスも自分が追跡すると言い、最終的にチンギスが盗賊たちを追跡している。この場面では、ベルグテイ以外にも、カサルも主張しているところからみて、チンギスのライバルがカサルでもあることを暗示しているが、いずれにせよ、ベルグテイがチンギスやカサルと同等にふるまっていることが見て取れる。一家の財産を守るという意味では協力的であるが、ベルグテイは自らの力を誇示しようとしている点が注目される。ベルグテイのこうした競争心はその後どうなっているのだろうか。

ベルグテイのチンギスへの真の服属の第一歩はこの8頭の馬の盗難事件の解決後になされたと考えられる。8頭の馬の盗難事件はボールチという人物の力添えによって解決するが、この事件の後すぐに、チンギスは許婚者であるボルテを娶りに出発している。そして、この嫁取りの際にチンギスはベルグテイを同行させているのである(巻2 § 94 の 02:36:06)。同行者としてカサルではなくベルグテイをチンギスが同行させているが、このことは偶然ではないであろう。これもまた前世代の婚姻の問題と絡めて次のように説明することができるからである。

イエスゲイが“ベルグテイの母”を第一夫人から第二夫人にし、チンギスの母を第二夫人から第一夫人にするために、ホエルンの掠奪をおこなったのではないかという仮説に基づけば、この2人の女性のどちらかを第一夫人にするかは、次の世代すなわちチンギスがタタルから正妻を娶るか、ホエルンの実家のホンギラトから正妻を娶るかで決定づけられる。チンギスは、タタルではなく、ホンギラトのボルテを娶ることで、ベルグテイにイエスゲイの第一夫人はホエルンであって、ホエルンの長男である自分が当主であることを宣告したのであったのではないか。

ベルグテイはチンギスの婚姻に同行する行為をとおして、この事実を受け入れなければならなかったと考えられる。チンギスはこの事実を決定的なものとするために、更なる手を打っていることが観察される。それは、婚姻後、ベルグテイに8頭の馬の盗難事件で友人となったボールチを迎えに行かせたことである(巻2 § 95 の 02:38:02, 02:38:03, 02:38:05)。形式的に引き入れた潜在的ライバルを決定的に味方につけるために、さらなる勇者を味方につける役割を担わせることによって、潜在的ライバルを深く組み込もうとしたのである。このことは秘史の巻2 § 95 の次のような記述に暗示されているように思われる(02:38:03-02:38:06)。

Bo'orcu Bel[gütey-yi güрге'ül=ü=et eçige-dür-iyen ülü kelele=n böğötür qongqor-i unu=at boro ömüge-ben böktür=ü=et Belgütei-lü'e ire=be. tere nököçe=kse'er nököçe=küi yosun teyimü.

「ボールチはベルグテイを連れて、己が父に言わず、猫背の淡黄色馬に乗って、灰褐色の己が

毛布を馬にしいてベルグテイと共に来たった。その友となりつつ友たる理はこのような次第である。」（下線部筆者）

この記述における「その友」とは明示的にはボールチのことを指しているが、非明示的にはベルグテイのことを指している可能性は大いにあろう¹¹⁾。

ここでは、ボールチをチンギスとベルグテイの間に介在させることにより、ベルグテイをチンギスよりも下位に置こうとする意図があったのではないかと筆者は考える。そして、その後、チンギスはベルグテイとカサルとともにケレイト族のトオリル・カン（オン・カン）に庇護を求めに行くが（巻2の§96の02:39:03）、ケレイト族のトオリル・カンに会う前に、ベルグテイの身分を定位させようとしたのではないだろうか。すなわち、当時、トオリル・カンの実力は、チンギスが援助を乞いに行く時点で、チンギスよりも優位にあったので、このトオリル・カンとの優劣関係に入る前に、チンギスは、ベルグテイを配下にするによって、身内内部のヒエラルキーの確認をしておいたということがあったのではなかろうか。

ただし、ベルグテイに言及される次の場面である巻2§99ではこの事実と矛盾するかのような叙述がある。ここでは、メルキトがチンギス一家を襲撃してくる際に、1頭の従馬を別としてチンギス一家にあった8頭の馬にテムジン（チンギス）、ホエルン、カサル、カチウン、テムゲ・オドチギン、ベルグテイ、ボールチ、ジェルメの8人が次々に乗り込んだと叙述されている（02:43:07）。ベルグテイはここではボールチよりも先に乗り込んでいるのである。この点は今述べたヒエラルキーに反しているように思われる。この箇所は、ベルグテイに言及されるすぐ次の箇所である同巻§103（02:49:10）とも連動している。ここでは、メルキト族に妻を奪われたチンギスが、ベルグテイ、ボールチ、ジェルメの3人をメルキト族の探索のために派遣しているのであるが、ここでもベルグテイの名前がボールチよりも先に見えるのである。いずれにしても、この3人はメルキト族の襲撃の際に8頭の馬に乗った男たちのうち最後の3人の名前と一致している。よく見ると、8頭の馬に乗った最初の5人はチンギスの母や同母兄弟たちという血縁者であり、ベルグテイ、ボールチ、ジェルメの3人はこのカテゴリーではないという違いがある。ベルグテイがボールチよりも先に言及されること背景には、ベルグテイを明示的にはチンギスの親族に連なるものとして提示しようとした意図があったのか否か。この点についてはさらなる考察が必要であろう。

ベルグテイの名前が出てくる次の箇所は巻3§104に1度（03:01:02）、§105に2度（03:03:08, 03:03:09）、§107に1度（03:09:09）である。これらはすべてチンギスが妻ボルテを奪還するために、ケレイト部族のトオリル・カンに援軍を求めにいく使者の役割として登場している。その際に、ベルグテイは常にカサルと対で登場していることが観察される。ベルグテイは、ケレイト部族との結託においてカサルとともにチンギスに尽力していることが観察される。むろん、この場合、メルキトに母を奪われているベルグテイとしては、自分の母をメルキトから奪い返すことが第一目的であったと推測してよいだろう。

次にベルグテイの名前が出てくる箇所は、巻3§112でメルキト部族の集落にいる母を連れ戻そうとするさいに4度現れるものである（03:20:04, 03:20:06, 03:20:07, 03:21:03）。ただし03:20:04は“ベルグテイの母”の表現の中に現れるベルグテイという語であるため除外す

る必要がある。4. で述べたように、メルキト集落にいるベルグテイの母は息子には会わず逃げ去っており、この事情については詳細に考察したのでここでは省略する。結論のみ言えば、ベルグテイはここで涙ながらに母と今生の別れをすることになる。

5. 2. タタル族との関連でみたブリ・ボコ事件

ベルグテイがメルキト族に奪われた母を連れ戻せなかったという叙述以後、秘史ではしばらくのあいだベルグテイの名前には言及されず、次に登場するのは、テムジンがチンギス・カンに推戴されたあとの、チンギスが次々に自分の陣営の者に役職を任命していく巻3 § 124 においてである (03:46:09)。ここで、チンギスはベルグテイとカラルダイ・トグラウンに駿馬を捕える馬飼人になるように任命している。この部分は、次に登場する巻4 § 131 の布石として存在している。このことは巻4 § 131 の冒頭が次のように始まっていることから判明する (04:08:04-04:08:05)。

tere qurim bidan-ača Belgütei jasa=at Činggis_qahan-nu aqta bari=ju bayyi=n bü=le'e.

その宴を我が陣営よりベルグテイがしきって、チンギス・カンの駿馬を引いていた。

上記のように、巻3 § 124 の馬飼人への任命がそのまま巻4 § 131 に接続しているのである。この巻4 § 131 で展開されるエピソードは、ベルグテイの名前の初出である、巻1 § 50 で言及されている事件の詳細となる。§ 50 では次のように叙述されている (01:31:04-01:31:06)。

Qutuqtu_Mönggür-ün kö'ün Büri_bökö bü=le'e. Onan-nu tün-tür qurimla=çui-tur Belgütey-yin mürü qanqas ča[bl]çi=qsan ter bü=le'e.

クトウグト・ムングルの子はブリ・ボコであった。オナン河畔の森で宴を張っているときに、ベルグテイの肩を切りつけた人物である。

上記の巻1 § 50 で先取して言及されている事件が勃発する実際の顛末が描かれているのが巻4 § 131 である。この節にはベルグテイの名前が4度現われている (04:08:04, 04:08:08, 04:09:01, 04:09:05)。ベルグテイの名前はチンギスに連なる系譜のなかに占める位置がないことを考えれば、ベルグテイの名前を系譜に入れるためには、この巻4 § 131 のエピソードはなくてはならないものである。しかも、ブリ・ボコがベルグテイ (04:19:01) の肩を切りつけたことは、同巻の § 136 にもチンギスの言葉の中で繰り返し述べられている。それゆえ、この事件は秘史において3度も言及されていることになる。

この § 131 では、ジャジラアト族のジャムカ陣営から多くの部族がチンギス陣営に合流してきたことを祝って、チンギスたちはジュルキン族とともに宴を張るのであるが、そのさいに、カタギン族のひとりが馬のはづなを盗んだのを、馬飼人であり、かつその宴のチンギス側の仕切り人でもあったベルグテイが捕まえる¹²⁾。これをジュルキン族の宴の仕切り人であるブリ・ボコがその盗人をかばったことから、2人の間に悶着が起こり、ブリ・ボコはベルグテイ (04:09:01) の肩を剣で切りつけるという事件が起こる。ベルグテイの傷をみたチンギスはそ

の事情を尋ねるのに対し、ベルグテイ (04:09:05) は次のように言う (04:09:06-04:09:09)。
 «mer üdü'üi bü=le'e. minu tula aqa de'ü-ťür mawuqali=n bolulča=ujai. bi ülü alja=qu bi ila'ari
 büy=yü.aqa de'ü-ťür sayi ijilidülče=n bü=küi-ťür aqa bü=tügei qorumut bayyi=. »

「傷はどうということはないです。私のために兄弟で仲違いしないでください。私は大丈夫です。兄弟としてはじめて仲良くしているときに、兄よ、やめてください、しばし待ってください。」

ここで「兄弟 aqa de'ü」というのは、ジュルキン族のブリ・ボコとチンギスが兄弟であるというわけではなく、ジュルキン族やチンギス一家やブリ・ボコというのは、カブル・カンという一つの祖先をもっているということを示している。具体的に言えば、ジュルキン族は、カブル・カンの長子オキン・バルカクの子ソルカト・ジュルキに由来し、チンギスはカブル・カンの第二子バルタン・バートルの子イエスゲイの子である。そして、ブリ・ボコはカブル・カンの第三子クトゥグトゥ・ムングールの子である。物語を先取りすると、チンギスは上記のようなベルグテイ (巻 4 § 132 の 04:10:04) の諫めには耳を貸さず、報復としてジュルキン族のコリジン妃、クウルチン妃を奪い取る。とはいえ、この仕打ちに対してジュルキン族が「仲良くしよう」と言ってきたために、チンギスは彼女たちをジュルキン族に返してやっている。

ところで、ベルグテイは肩を切りつけられたにも関わらず、なぜチンギスをジュルキン族との仲を取り持とうとしたのであろうか。むろん、ベルグテイの発話をそのまま受け取ることもできるかもしれない。しかし、ベルグテイの出自をタタルとするならば、別の読み方が生まれてくる。この場合、ジュルキン族との揉め事の後に § 132 でタタル族が金国と仲違して金国に追われる立場になったということに言及されていることをみると、タタル族との関連でこの場面を読み解く可能性があるからである。しかも次のように、秘史はチンギスとジュルキン族との揉め事の叙述のすぐ後にこの事件に言及しているのである (04:10:07-04:11:02)。

jiči müt jokildu=ya ke'ekde=ju Qorijin_qadun Qu'určün_qadun jirin-i ičü'a=ju jokildu=ya ke'e=n
 elčileldü=n bü=küi-ťür Kitat_irgen-ü Altan_qan Tatar-un Megujin_se'ültü+ten eye-dür-iyen ülü
 oro[ql]da=run Ongging_čingseng-e «čeri'üt jasa=ju bü sa'ara= bö=et.» ke'e=jü ilē=jü'üi.

ところが、彼らに「仲良くしよう」と言われてコリジン妃、クウルチン妃 2 人を返して「仲良くしよう」と言って使者を遣わし合っているときに、金国の民のアルタン・ハンはタタル族のメグジン・セウルトラに和議を入れられず、王京丞相に「軍勢を整えてひるむな」と言って派遣した。

金国の要請を受けて、チンギスは巻 4 § 133～§ 134 において金国に加勢して、ケレイト族のトオリル・カン、ジュルキン族のサチャ・ベキ、タイチュとともにタタル族を攻撃しようと持ちかける。しかし約束を守ったのはトオリル・カンだけで、ジュルキン族は約束を違え、待ち合わせ場所に来ない。それどころか、同巻 § 136 において、ジュルキン族はチンギスのタタル攻撃の際に、チンギス陣営の 50 人の衣服をはぎとり、10 人を殺害するという挙動に出たと綴られている。ベルグテイの名前に言及されるのは、このすぐ後で (04:19:01)、チンギスはジュルキン族がいかに卑劣であるかを次のように 4 つ列挙して非難している (04:08:07-04:19:07)。

Činggis_qahan maši kilingla=ju ügüle=rün « Jürkin-ne ker eyin kikde=n büle'ei bida. Onan=nu tün-tür qurimla=qui-tür bawurči Šiki'ür-i müt gü ašgi=bai. Belgütey-yin mürü müt gü ča[b] či=bai. jokildu=ya ke'ekde=jü Qorijin_qadun Qu'určün jirin-i iču'a=ju ök=bei bida. te'ün-ü qoyina erten-ü öšten kišten ebüges ečiges-i bidan-u bara=qsat Tatar-i qamsa=n morila=ya ke'e=n Jürkin=i jirqo'an üdüt gülice=jü ese gü irekde=be. edö'e basa dayyisun- tür šiqan=n dayyisun müt gü bol=yi»

チンギス・カハンは非常に怒って言うのに、「ジュルキン族に我々はどうしてこのようにしてやられているのか。オナン河の森で宴を催したときに料理番のシキウルを彼らはなぐった。彼らはベルグテイの肩を切りつけた。『仲良くしよう』と言われて、我々はコリジン妃、クウルチン妃 2 人を返してやった。その後、『昔の仇あり、恨みある、我々の祖先や父たちを害したタタル族をのみこみに出馬しよう』と言ってジュルキン族を六日間待たせたけれども来なかった。いまや彼らは敵に近く、敵になろうとしている (04:18:08-04:19:07)。

以上のようなチンギスの言葉はともかく、重要なことは、ここでジュルキン族の事柄とタタル族の事柄とが連動して叙述されているという事実である。そしてこの叙述で語られるジュルキン族に関する内容は、ジュルキン族とタタル族との結託を暗示しているということである。これを踏まえると、チンギス陣営にいるものの、タタル出自のベルグテイはジュルキン陣営にいたブリ・ボコに肩を切られた事件を大事件にはしなくなかったものと推測される。とすると、§ 132 の「チンギス・カハンはベルグテイがそれほど諫めてもよしとせず」(巻 4 § 132 の 04:10:04) という叙述には、新たな意味が立ち現われてくる。一見、チンギスが弟思いの行動をしているようでいて、実際は、この事件を大きくすることによって、ベルグテイを不利な立場に追い込んでいるのである。むろん、この解釈はジュルキン族がタタル族と結託している場合であるが、たとえジュルキン族がタタル族と結託していない場合においても、ベルグテイがジュルキン族に好意的であることには変わりないと言えよう。なぜなら、敵(チンギス)の敵(ジュルキン族)は味方という論理が成り立つからである。繰り返すが、ここで重要なことは、ジュルキン族の件が、タタルの件と連動して叙述されているという点である。

チンギスは § 136 において、ジュルキン族を攻撃し、サチャ・ベキとタイチュを亡き者にしている。そして、§ 139 において、チンギスについてはジュルキン族をせん滅し、その配下にある民を支配下に入れたことが述べられている。ジュルキン族をせん滅したことは、チンギスにとって、系譜的に重要な意味をもったものと考えられる。なぜなら、チンギスはカブル・カンの子孫の有力部族をいっきにせん滅したということになるからである。

次にベルグテイに言及している巻 4 § 140 では、ベルグテイの名前が計 9 回出現する (04:26:09, 04:27:01, 04:27:04, 04:27:05, 04:27:06, 04:27:08, 04:28:01, 04:28:05, 04:29:02)。ここでは、チンギスが、ベルグテイをブリ・ボコと相撲をとらせ、相撲にかこつけてベルグテイにブリ・ボコを殺させている。表向き、このブリ・ボコ殺害にはベルグテイのブリ・ボコに肩を傷つけられたことに対する報復の意味を読み取らせようとしているが、実際は、タタル族と結託している可能性の高いジュルキン族陣営にいたブリ・ボコをベルグテイに殺させることによって、ベルグテイをタタル族から遠ざける役割を果たしたといえる。

5. 3. ナイマン族侵攻を主張するベルクテイの意図—タタル族への機密漏洩との関連で—

次にベルグテイの名前が登場するのは巻 5 § 154 である。当該節においてはベルグテイの名前に 6 回言及されている (05:19:10, 05:20:01, 05:20:03, 05:21:01, 05:21:03, 05:21:05)。この節の内容についてはすでに検討したことがあるので詳細は避けるが¹³⁾、この節では、チンギスは、ついにタタル族をせん滅し、タタル族の民をどうするかの評議をおこなう。敵人の背丈を車のこしきと比べてそれに達している人間はすべて殺害するという決定を、ベルグテイはタタル族の領袖であるイエケ・チェレン (この人物はチンギスに投降し、イエスイとイエスゲンという娘 2 人をチンギスに嫁させている) に漏らしてしまう。その結果、タタル族はチンギス陣営の兵士をできるだけ多く道連れに死のうとしたことでチンギス陣営に多大の被害を出してしまう。ベルグテイのこの行為を重くみて、チンギスはベルグテイにそれ以降の評議に加わらないように命じる。ベルグテイの出自がタタル族であるとすると、ベルグテイの行為はチンギスに大いなる疑念を呼び起こしたことは間違いない。

この推測がかなり妥当なものであることは、次にベルグテイに言及される巻 7 § 190 において確認される。ここでは、ベルグテイがナイマン族への侵攻を積極的に主張しており¹⁴⁾、表層的には、この行為は巻 5 § 154 におけるタタル族への機密漏洩を挽回しようとしているかのように見える。ベルグテイ (07:15:09) は次のように言う (07:15:09-07:16:02)。

« amidui bö'e=tele nökör'e qor-ıyan abda=asu a=qsan ya'un tusa büi. töre=qsen ere-de ükü=esü taki qor numun-lü'e-ben yasun-lu'a niken-ne kebbe=esü ülü ü sayın büi.

命があっても敵に矢筒を取られるならば、生きて何の益があろうか。男と生まれた者、死んでも自分の矢筒、弓、骨とともに一つに倒れるならばいいのではないか。

勇ましい言葉である。しかし、このベルグテイの発話より前に、ナイマン族へ出馬するのを躊躇する兵士が多くいたことが当該節で次のようにある (07:15:04-07:15:06)。

olon gü'un ügüle=rün «aqtas bidan-u turuqat büi. edö'e yeki=kün bida.» ke'eldü=jü'üi.

多くの人がいうのに、「われらの馬群はやせている。我々は、今どうしようというのか。」と共々に言った。

馬群の状態の悪さについての秘史のこうした叙述を考慮に入れると、ベルグテイの発話は、彼の出自がタタル族であるという仮説に基づけば、ナイマン族と戦うことにより、チンギス陣営の多くのモンゴル族を道連れに死のうという決意の表れと受け取れなくもない。とくに、巻 5 においてベルグテイがチンギスに叱責されたのは、タタル族の残党がチンギス陣営の多くを死出の道連れにしたゆえにであったことを指摘しておきたい。この巻 5 をうけて、ベルグテイは自分がナイマン族と戦うことによって、チンギス陣営の多くの兵士を死出の道連れにしようとしたのではなからうか。「敵に矢筒を取られるならば」における「敵」としてチンギス陣営を指していてもおかしくはないのである。つまり、ベルグテイの言葉は、単なる勇ましい発話ではなく、破滅的なものなのである。オドチギンもナイマン族への侵攻を主張してはいるが、ベ

ルグテイの発言は、オドチギンのそれとはレベルを異にするものであるといえる。

これに対するチンギスの反応として、「ベルグテイ長官（巻 7 § 191 の 07:18:01）のこの言葉をやしとして」と叙述されている。これは、チンギスの度量なのか、チンギスの洞察力の低さなのかは判断できないが、最終的に、ベルグテイの意見を入れて、ナイマン族への侵攻を支持している。チンギス陣営の馬群の状態は決してよくなかったらしいことは、チンギスたちが奇策を弄してナイマン族の領袖であるタヤン・ハーンを恐怖に陥れている展開から推測される。

いずれにせよ、ナイマン征伐は、ベルグテイのチンギスに対する最後の抵抗と位置付けることができそうである。しかし、ナイマン族との戦いにチンギス陣営が勝利したことによって、ベルグテイの抵抗は終息せざるをえなかったと考えられる。このナイマン族との戦いの勝利以降、ベルグテイはもはや物語の中に実質的な役割を与えられなくなっていることが観察される。

秘史の「作者」がベルグテイに同情的であったことは、ベルグテイの実質的に最後となる登場場面において、戦場で生命を賭する勇者らしい言葉で飾っていることである。こうすることによって、ナイマン族征伐の勝利の功績をベルグテイに担わせようとしているのである。この巻 7 § 190 の 07:15:09 および次の § 191 の 07:18:01 においてそれぞれ 1 回ずつ、ベルグテイは「ベルグテイ長官」と表現されていることは注意を引く。秘史においてベルグテイに「長官」がつくのは 3 回しかないが（03:21:03, 07:15:09, 07:18:01）、決して偶然につけられたものではないと考えられる。ベルグテイに「長官」がつけられる最初の事例は、前述のように、ベルグテイがメルキト族に奪われた母を探しに行き母を見つけ出せなかったときに用いられている（03:21:03）。前述のように、ベルグテイは母を失うことで出世街道を進む道を開いたので、このときに「長官」という称号がつけられたことは象徴的に意味があることである。このナイマン征伐のさいに秘史の「作者」はベルグテイに勇者としての最後の輝きを付してやっているが、この時にも「長官」の称号がつけられているのである。むろん、以上の考察からは意外ではないが、ナイマン征伐は表面上、ベルグテイの勇敢な発言が大きな意味をもったにも関わらず、ナイマン征伐後、チンギスの口からベルグテイに感謝の言葉は一切ない。

ナイマン族征伐に関わる場面以降においてベルグテイに言及されるのは 3 回のみである。その最初のものは、巻 8 § 205 であるが（08:36:07）、ここではチンギスがボールチの功績をたたえる発話のなかでベルグテイの名前に触れられるにすぎない。すなわち、チンギスはベルグテイを遣わしてボールチを迎えにやらせたことに言及されているにすぎない。2 つめのものは、巻 10 § 242 で（10:23:08）、チンギスが親族に民を分け与えるさいに、ベルグテイには一千五百の民が与えられたと触れられるだけである。しかもここでは、ベルグテイは明らかに多数のうちの一人としての位置づけであって、存在感は全くないといってよい。ベルグテイに触れられる最後の箇所は巻 11 § 255 である（11:33:02）。ここでは、チンギスの後継者が第三子のオゴタイに決まった後に、カサル、アルチダイ、オドチギン、ベルグテイの順番に、それぞれの子孫はその一人をして統治させるように言う命令の中でベルグテイの名前に触れている。ここでもベルグテイは多数のひとりにはかすぎないことが観察されるのである。

以上、ベルグテイの名前に言及されるすべての事例を拾い上げながら、ベルグテイの出自をタタルとした場合の解釈を展開してきた。注意すべきは、ベルグテイは表向き常にチンギスに協力的にふるまってはいるものの、非明示的には常にチンギスに抵抗していることである。

ベルグテイに関していえば、その行動のあり方は明示の意味と非明示の意味が正反対に逆対応する「二重の意味構造」となっている点は注目されてよいであろう¹⁵⁾。

6. まとめ

以上、ベクテル、“ベルグテイの母”、ベルグテイという順で考察を進めてきたが、整理すると次のようになる。

まず、ベクテルに焦点を当てる場合、この人物に関する最も大きな事件は、この人物がチンギスとその弟カサルに殺害される事件であることを確認した上で、この事件の背景となる魚の奪い合いというチンギス、カサル、ベクテル、ベルグテイの間において起こった揉め事の叙述を検討した。ここで重要なことは、その箇所において出てくるウジン・エケ（母なる夫人）が誰を指すかということであるが、従来の解釈ではチンギスとカサルの母であるホエルン夫人を指すものと解釈されてきた。しかし本論では§78ではホエルン夫人を指しているが、§76ではベクテルとベルグテイの母を指示しているのではないかという解釈を提起した。この解釈は、ベクテル殺害の意味を再検討させることになる。この場合、ベクテルが殺害されることで、イエスゲイの2人の未亡人、すなわちホエルン夫人と“ベルグテイの母”の間の勢力争いにおいて、ホエルン夫人が勝利したことを示唆しているのではないかという考察を展開した。従来、2人の夫人の勢力争いは全く不可視の領域であったといえる。さらに、この争いは2人のイエスゲイ夫人の間にとどまらず、夫人の争いで勝利したホエルン夫人とチンギスとの間の勢力関係も決定づけたことに言及した。ベクテル殺しの波紋の終点は、タタル部族の营地から拾った子供すなわちシギ・ホトクをホエルン夫人がチンギスの「第六の弟」とする地点までであるとみた。

次に、“ベルグテイの母”に着目したが、この人物に関わる最大の事件と言えるのはメルキト族に奪われて、息子のベルグテイが迎えに来るにも関わらず、自ら身を隠してしまうという事件である。この事件は、一般に、チンギスの正妻ボルテがメルキト族に奪われた事件として印象付けられているが、秘史の叙述をよく観察すると、“ベルグテイの母”がボルテよりも先に奪われていることが観察される。この事実は、秘史でさりげなく叙述されているために見えにくくなっているが、この事実はメルキトのボルテ襲撃事件の意味の再検討を促すものとなる。そこで、“ベルグテイの母”を略奪した行為が、チンギスの正妻ボルテを略奪する行為の“ついで”になされたかどうかの検討をおこなった。その際、“ベルグテイの母”がイエスゲイの実第一夫人であったのではないかとする筆者の以前に提示した仮説にもとづくと、決して“ついで”のことでなかったと考える必要があることを指摘した。つまり、メルキト襲撃の名目上の目的は、イエスゲイの第一夫人であった“ベルグテイの母”であって、ボルテを奪ったのは、襲撃時点ですでにイエスゲイが死去しており、時代はすでにイエスゲイの次の世代すなわちチンギス時代に入っていたためではないかと考察した。“ベルグテイの母”は秘史においては極力目立たないように叙述されているが、この人物が最終的にどうなったかについての叙述がきちんとなされていることを指摘し、このことは秘史がこの人物を単なる脇役以上の意味をもつ存在として描こうとした形跡であるとみなした。

最後に注目したのはベルグテイである。その際、ベルグテイの兄ベクテル殺害事件後のベルグテイのふるまいに焦点をあわせて考察した。ベルグテイは表面的にはチンギスに協力的であるものの実際にはライバル心を燃やしていたことを指摘し、ベルグテイのチンギスへの真の服属の第一歩は、チンギスがホンギラト族のボルテを娶りに行く際にベルグテイを同行させるという行為においてではないかと考察した。なぜなら、チンギスの家系が姻族をタタル部族ではなくホンギラト族に差し替えることを決断したのはイエスガイであるが、この決断が真に社会的認知を受けるには、次の世代のチンギスがホンギラトから妻を娶ることが必要だからである。チンギスがホンギラト族からボルテを娶る行為は、このことを象徴する出来事となるのである。それゆえ、チンギスはボルテを娶る同行者として、敢えてタタル族出身のベルグテイを選んだのではないかと推測されるのである。

これ以外に特に重要だと思われるベルグテイに関連する事件は、秘史でベルグテイとジュルキン族陣営のブリ・ボコとの確執とナイマン族への侵攻を主張するベルグテイの発言である。前者のブリ・ボコに関わる一連の出来事は一見ジュルキン問題として扱われているが、実はタタル問題として読み解けるという論を展開した。すなわち、ベルグテイは最終的にブリ・ボコを殺害しているが、この殺害はベルグテイにとって不本意なことであった可能性がある。後者のナイマン族への侵攻を主張するベルグテイの主張であるが、これも一見するとチンギス陣営に立っているようであるが、このときのチンギス陣営の馬群の状態は悪かったという叙述にもとづくなら、ナイマン族との攻防においてベルグテイはチンギス陣営に属しながらも、できるだけ多くのモンゴル兵を道連れに死のうとしていた意図があるのではないかと推測した。ベルグテイのこのような破滅的な意図は、ベルグテイに言及される直前のエピソードにおいて、ベルグテイがタタル族に機密を漏洩したために、タタル族がチンギス陣営の兵士を数多くして死出の道連れにしたという事件と呼応するものと考えれば首肯できるものとなる。ナイマン族への侵攻が成功した後にはベルグテイに関する新たな内容をもつ叙述がないことから、ナイマン族に対するチンギス陣営の勝利は、ベルグテイのチンギスへの抵抗を終わらせるのに十分な効果をもっていたと考えることができると結論づけた。

以上の考察を踏まえ、秘史においてベルグテイの最後の出番をベルグテイのナイマン族征伐への強い意志を表明する言葉で飾っているもう一つの意味を指摘した。それは、秘史の「作者」が表面的にはナイマン征伐の功労者としてベルグテイを立てようとしていることであり、このことは「作者」のベルグテイへの共感を示唆するものとなっているということである。

以上、“ベルグテイの母”をタタル部族出身とする仮説にもとづくと、秘史の新たな非明示的物語が立ち現れることを論じてみた。

注釈

- 1) 藤井真湖, 「チンギス・カンをめぐる伝承の諸相—『チンギス・カンの伝承と歴史の地』という小冊子をもとに—, 『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告第4号』, 2009年, 41-56頁, 藤井真湖, 『「元朝秘史」第268節におけるイエスイ妃に関する叙述—グルベルジン・ゴア妃の伝説からみた解釈—, 『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告第5号』, 2010年, 77-94頁, 及び藤井真湖, 『「元朝秘史」第53節~68節の有機的解釈の試み—“ベルグテイの母”の出自をもとに—, 『言語文化学会論集』第34号, 2010年, 167-179頁。
- 2) 栗林均・确精扎布編, 『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引, 東北アジア研究センタ叢書第4号, 東北大学東北アジア研究センター, 2001年。ただし本稿ではtの下に点すなわち・の付いた文字はt, 同じくkの下に点すなわち・の付いた文字はk, に便宜上代替した。その他、原文ではjはどのように上にながついているが便宜上、通常のjで代用したことを断っておく。
- 3) 小沢重男, 『元朝秘史全釈(上)(中)(下)』, 風間書房, それぞれ1984年, 1985年, 1986年刊行, 小沢重男, 『元朝秘史全釈続放(上)(中)(下)』, 風間書房, それぞれ1987年, 1988年, 1989年刊行, 『元朝秘史』(上)(下), 岩波文庫, 1997年。
- 4) 小沢前掲岩波文庫『元朝秘史』(上) 86-87頁参照。
- 5) 前掲論文のとくに藤井真湖, 『元朝秘史』第53節~68節の有機的解釈の試み—“ベルグテイの母”の出自をもとに—, 『言語文化学会論集』第34号, 2010年, 167-179頁。
- 6) タイチウド族のチンギスへの襲撃が「文学上」何を意味するのかはさらに考察の必要がある。とくに、タイチウド族のチンギスへの襲撃はその目的が曖昧であることは注意してよい。彼らはチンギスを捕獲した後、家々に順番に監視させており、すぐに殺害していない。この事実からみても、タイチウド族のチンギス襲撃の真の目的は不明と言わざるをえないのである。
- 7) ホエルンが養子にしたこの4人については、巻4§138にまとめて叙述された部分がある。
- 8) ボルテに馬が与えられなかったことについて、小沢重男は『元朝秘史』(上), 岩波文庫, 1997年, 92頁で次のようにコメントしている。「ここで特に注目されるのは、チンギスの妻ボルテ夫人に『馬が欠けた』と記されていることである。然も予備の馬(kötöl)一頭が残っているとも記されている。この記録は、当時のモンゴル草原の社会では、自分の妻を犠牲にしても予備の従馬を用意することの方が大切であることを物語るものと言えよう。この結果、ボルテ夫人はメルキド族にとらわれることが一〇一節で語られる。」
- 9) 前掲論文のとくに藤井真湖, 『元朝秘史』第53節~68節の有機的解釈の試み—“ベルグテイの母”の出自をもとに—, 2010年, 172-173頁を参照。
- 10) 『元朝秘史』(上) §52~53を参照。
- 11) 前掲書の小沢重男, 『元朝秘史』(上), 1997年, 90頁によると、小沢は「ボールチがベルグテイを到らせしめて」という使役態での表現を、ベルグテイよりボールチに敬意を示していると解釈している。たしかに、この部分を見る限り、小沢の解釈がとりうるかもしれないが、巻2§99でメルキトに襲われたときに馬に乗る順番は、ベルグテイのほうがボールチよりも先であることからみると、必ずしもそうではないとみるべきである。
- 12) ただし、「捕えた」という文章の主語は原文では欠落している。
- 13) 藤井前掲論文(2009年)の53-54頁を参照。
- 14) ちなみに、チンギスの弟であるオドチギンは、馬群の瘦せているのを言い訳にするのは言い訳にはならないとして、ナイマン族への攻撃を主張している。そして、ベルグテイの勇ましい言葉は、オドチギンの主張を受けたものである。とはいえ、ベルグテイは前述のように、巻3§124においてチンギスから馬飼いに指名されていることも思い出す必要があろう。つまり、馬が瘠せていることで攻撃がかけられないというのは、ベルグテイの馬群管理にも関わっている問題なのである。ベルグテイの立場からすると、自分自身の非を指摘されたともいえる。
- 15) 互いに対立する明示の意味と非明示の意味がモンゴルの伝承において見られることについての考察は藤井麻湖, 『モンゴル英雄叙事詩の構造研究』, 風響社, 2003年における各章を参照。